
ポイズンガール

藍沢 砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポイズンガール

【Nコード】

N2028Y

【作者名】

藍沢 砂糖

【あらすじ】

「お父さんは私が責任を持って、殺してあげるからね」

理科準備室を掃除していた夏川奈々瀬は薬品棚の奥から古いプリント用紙を見つけた。それはお互いの食べ物に仕掛けをしあうサバイバルゲームの進行表だった。興味本位で友人達とゲームを始めた奈々瀬だったが、ゲームは異常な程に加速してゆく。

正義の味方、笹中悟はちょっとしたきっかけで人を殺してしまった。正義の味方から殺人犯に転落した悟は自らの正義を守るために力いっぱい逃げ出した。たとえ誰に悪者だと罵られても、自分は正

義の味方でい続けなければならない。悟の逃亡生活が始まる。
そして奈々瀬と悟の運命は交差する。

非日常の扉

―選択を間違えれば、分かってるよね。

遮光カーテンを閉め切った薄暗い理科準備室に、揺るぎのないはつきりとした声が響かずに充満した。密閉された狭い部屋の空気は凝っていて息苦しい。

放課後の校舎は昼間の賑わいが嘘だったかのように静かだった。まだ部活や補習で残っている生徒が沢山いる筈だが、この密室には一切の音が入ってこない。まるでこの校舎には、いやこの世界にはここにいる五人以外消えてしまったのではないかという程の静まりようだった。

ここは別世界だ。

蒸し暑さと息苦しさに加えて薬品特有の鼻を衝く臭いまであり、偏頭痛を引き起こすにはこれ以上ない条件の環境だった。

実験用の水道付きの大きな机に置かれた二つのビーカーには黒い液体がなみなみと注がれている。その前の丸椅子に着いた夏川^{なつかわ}奈々瀬は、ぷつぷつと細かい泡が浮き上がってくるそのどす黒い液体を無表情に見ていた。

声は再び聞こえる。

「見たって分からないよ。どっちも同じ色」

薄い口唇をおもむろに舌で湿らせた奈々瀬は声のする方に刃物のような鋭い視線を向ける。机の向かい側には、薄笑いを浮かべながら長い髪を指先で弄ぶ篠原^{しのはら}紗季が頬杖をついて奈々瀬を舐めるように見ている。

紗季は更に続ける。

「選択を間違えれば…」

死ぬよ。

そう結んで愉快そうに目を細める紗季。

立合人である他の三人も心配そうに、あるいは何かに期待しながら

ら奈々瀬と紗季を交互に眺めている。何も答えずに大きく息を吐いた奈々瀬は、制服のブラウスのボタンを一つ外して襟元を摘まんで扇ぐ。

暑い。奈々瀬の耳の裏側から垂れた汗の滴が首筋をつうと伝い、露わになった彼女の白い胸元を濡らす。

そして奈々瀬が初めて声を発した。

「ズルはしてないんだよね。誓える？」

当たり前じゃないの、と吐息混じりに答えた紗季は机の上に両肘をついて手を組み合わせた。祈りを捧げているように組んだ両手の奥から二つの瞳が奈々瀬を真っ直ぐに捕らえている。奈々瀬からは彼女の口元は見えないが恐らく、笑っているのだろう。

どちらかと言えば紗季の事は嫌いではない。

しかし彼女がこのように時折見せる薄笑いと実験動物を観察するかのような無機質な視線だけはどうしても好きにはなれなかった。

紗季は口元を隠したまま言う。

「ビーカーに入っているのは正真正銘どこにでも売ってる普通のコーラ。ただし、片方はハズレだけだね。それは奈々瀬も解ってるでしょ」

語尾を釣り上げて首を傾げる紗季。

「選択権は奈々瀬にあるんだから、どちらでも好きな方を飲みなよ。私はいくらでも待ってあげても良いんだけどね、他の皆が退屈しちゃうじゃない」

組んでいた手を解いて口元を露わにする紗季。やはり彼女は、笑っていた。紗季は胸まである長い髪を人差し指に絡ませて遊んでいる。

奈々瀬も同じように小さく笑った。

「そうだよ。紗季は勝負事でズルするような馬鹿じゃないもんね。確率は二分の一で条件は私も紗季も同じ。片方は普通のコーラでもう片方は…」

「毒入りだよ」

紗季は奈々瀬の言葉に被せてぎょろりと目を見開いた。

彼女は胸ポケットから茶色い小瓶をゆっくりと取り出して奈々瀬に見せつけるように軽く振る。赤く濁った液体が瓶の中でちゃぷちやぷと踊った。

奈々瀬は全く動じず無表情のままだったが、周りで見ている立会人の誰かがごくりと唾を飲み込む音が聞こえた。

奈々瀬と紗季は互いに視線を外す事なく見詰め合っている。

毒を用意してきたのは紗季だが、どちらかのビーカーに毒を混ぜたのは立会人の一人、ビーカーをシャッフルしたのは別の立会人、その二つのビーカーを机の上に置いたのもまた別の立会人。

つまり、この場にいる五人ともどちらが毒入りかは判らない。

「どうしたの、奈々瀬。もしかして…ビビっちゃった？」

なんなら私が代わりに飲んであげても良いんだよ、と紗季は挑発してくる。彼女はいつもこうして精神的に揺さぶりを掛ける。この余裕の表情から発せられるプレッシャーに押し潰されて判断を誤った者が今まで何人いた事か。

一見動じていないような奈々瀬も内心では追い詰められている。

紗季の冷たい瞳は「早く飲め、早く毒を飲んでのた打ち回れ」と急かしてくる。それでも奈々瀬はその瞳から視線を外さない。

目を逸らしたらプレッシャーに負けたという事だ。精神的な負い目を感じてしまう、そうなってしまえば紗季の思うつぼだ。

奈々瀬の顎先から汗が一滴落ちる。

それは机の上に零れ、ひたりと小さな音を立てた。

「あら、暑いかな？」

紗季は彼女の汗が落ちるのを目敏く見ていた。この一言は、一挙手一投足を漏れなく見られているというプレッシャーになる。このまま心理戦で紗季に勝利する事はなかなか容易ではない。

すると紗季は目を再び細めた。

「それにしても奈々瀬ったら凄い汗だね」

「何なのよ、さっきからいちいちうるさいわね」

しまったと思いながらも、もう遅い。紗季の挑発に乗ってしまったのだ。下手に相手をするとな彼女のペースに巻き込まれ兼ねないのは十分承知の筈だったが、つい言い返してしまった。

案の定、更に紗季が畳み掛けてくる。

「ブラウスもぐっしより濡れてるじゃない。ホント女子高で良かったね。そんな汗だくの姿、男の子に見られたくないでしょ」

今度は無視した。

しかし奈々瀬が一度相手をしてしまった事に付け込むように、紗季は蛇のように湿気を孕んだいやらしい目で奈々瀬を見ている。

実際、奈々瀬は暑さと緊張感の所為でかなりの汗をかいていて、汗でブラウスがじっとりと背中に貼りついて下着の線が浮き上がっている程だ。確かに思春期の男子には見せられない。薄暗い部屋で、奈々瀬の細く締まった^{からだ}軀のラインが露わになっている様はどこか官能的だ。

「ところで、どうするの。恐いんだったらホントに私が代わりに飲んであげても良いんだよ」

「冗談言わないで。私が飲むに決まってんじゃない。紗季こそ落ち着きなくぺらぺら口数が多いけどホントは私がアタリを引くのが、負けちゃうのが恐いんじゃないの？」

ほんの僅か、紗季の表情が変わった。

「へえ、そんな事言うんだたらさっさと飲んだら良いじゃないの」
さあ、と催促してくる紗季。

意を決した奈々瀬は、勢いよく立ち上がって右側にあったビールを手に取った。三人の立会人の視線が奈々瀬の右手に集中する。

数秒遅れて紗季もゆっくりとビールカーに目を向けた。

「ホントにそっちで良いの？」

「今更変えないよ」

「そっちが毒入りかもしれないよ？」

「だから、これで良いんだってば！」

まだしつこく揺さぶってくる紗季に対して苛立ちを覚えた奈々瀬

は、彼女に向かって怒鳴りつけた。しかし暖簾に腕押しと言ったような様子で紗季は相変わらずの薄笑いを浮かべている。

奈々瀬は手に取ったビーカーを見詰める。

「奈々瀬、ルール分かってるよね。一度これで良いって宣言したらもう変更はきかないんだよ」

分かってるよ、と返す奈々瀬。

そしてもう一つのルール。飲むときは一気に飲み干さなくてはならない。奈々瀬は頭の中でそのルールを思い浮かべて、大きく深呼吸をした。

そして。

奈々瀬はビーカーの中身を一気に喉に流し込む。

その様子を紗季と三人の立会人は食い入るように見ていた。期待と不安の入り混じった表情の立会人達に対して、ただ一人紗季だけは感情の読めない冷ややかな目で奈々瀬の喉の動きを観察していた。飲み干した奈々瀬が机に、割れてしまいそうな勢いでビーカーを置く。息を切らしている奈々瀬の姿を四人はじっと見ていた。

そして。

奈々瀬は机に突っ伏すように倒れ込んだ。彼女は真っ赤な顔をして言葉になっていない苦しげな呻き声を上げる。

奈々瀬！ と立会人達は悲鳴にも似た声を上げた。

紗季は今まで通り上品に笑っている。

「ほら、言っただでしょ。そっちが毒入りかもしれないよって。ホントに人の忠告はちゃんと聞くもんなんだよ」

獣のように唸って喉を掻き毟る奈々瀬を見下ろして悦に浸る紗季は、まさに悪魔のように邪悪な高笑いを上げた。机に這いつくばる奈々瀬は充血した目で縋^{すが}るように紗季を見ている。そしてがたがたと震える手を勝者の彼女に伸ばした。

「負け負け負け、奈々瀬の負けよ」

目に涙を溜めて見上げる奈々瀬を切り捨てた紗季は本当に愉快そうに、映画に出てくるような悪い魔女に似た甲高い笑い声を上げて

いる。

立会人達は目の前で起こる凄惨な様子を信じられないといった様子でいる。その中で最初に落ち着きを取り戻した一人が別のビーカーに水を汲んで奈々瀬に差し出す。しかし奈々瀬にはそれすら目に入っていないようだ。

悶え苦しむ奈々瀬をしばらく見て満足したのであろう紗季は、安全なもう一つのビーカーを手を取った。

「思いつきり笑ったから喉が渴いたわ。これは勝利の祝杯として頂いてあげる。のた打ち回る奈々瀬を見ながら飲む勝利の美酒って所かな」

勝利とは敗者を踏み躪^{にじ}るところに美德があると考えている紗季。本当に性格が悪い。紗季は悶える奈々瀬を見下ろしてビーカーに口を付け、手首を傾けた。

そして優雅に喉に流し込む。

「ばーか」

奈々瀬の声だった。

「引かなかったな。何が勝利の祝杯だよ、私が飲んだのは普通のコーラだったよ」

何事もなかったかのように立ち上がった奈々瀬はブラウスの袖で口元を拭った。周りの皆は目を丸くしている。中でも一番驚いて目を白黒させているのは勿論、勝利を確信していた紗季本人だった。

次の瞬間、ガラスが割れる音が凝った空気を切り裂く。

紗季がビーカーを落とした。それと同時に紗季はその場に崩れ落ちて、汚れた床の上でのた打ち回る。目を真っ赤に充血させてぼろぼろと涙を零す紗季から、つい一分前までの傲慢な姿はもううかがえない。

痙攣の始まった紗季を、奈々瀬は悠々と見下ろして、ぽつりと零した。

「残念、私の勝ちみたいだね」

奈々瀬は艶っぽく濡れた舌を出して笑った。

※

夜の湿った空気はアスファルトの匂いをまとっている。

高速道路の高架とそびえる古い工場に切り取られた濃紺の狭い夜空に、不細工で形の悪い下弦の月がふわりと浮かんでいた。

生ぬるい気温とは裏腹に笹中悟は少し冷たい汗をかいていた。

…もしかすると、

…あの事を。

街灯も疎らで、足元も良く見えない暗い場所に立っているのは悟と、もう一人は鮫島と名乗る胡散臭い男。悟はこの男の事を知らない。

和柄のアロハシャツに胸元には金のネックレス。猫背で不健康そうな鮫島はどう見ても性質の悪いチンピラだった。この男とは初対面だが、自分にとってプラスになるような人物ではないという事は判断できる。

「いったい何の用なんです、話ならこんな所じゃなくてファミレスとかでも良いんじゃないですか」

悟は静まり返った夜の世界に耐え切れずに第一声を発した。しかし鮫島はその問いには答えず、にやりと笑って並びの悪い歯を見せた。

「まあそう焦るなよ。一応確認しとくけど、アンタ笹中さんで間違いないんだな？」

悟は一瞬戸惑って曖昧に頷く。

「そうだな。笹中悟、二十七歳だっけ。間違いないよな。ホント会いたかったぜ、笹中さんよ」

鮫島は先の曲がった煙草に火を点けた。

フルネームも年齢も正しい。どうやら人違いではないようだ。

「だから何の用なんです」

悟は少し語気を強める。

「そんなに焦るなって。ゆっくり説明してやるから」

いやらしく笑う鮫島は口と鼻から一緒に煙を吐いた。

今まで真面目に生きてきた悟はこの手の人種が一番苦手で、学生の頃も所謂不良と呼ばれる者を極端に避けていた。恐かった訳ではないが、関わりと自分まで馬鹿になると思っていたからだ。

会話を交わすだけで吐き気がする。

こんな人物が自分の名前を知っている事に嫌悪感を覚えた悟は眉間にしわを寄せて鮫島から視線を外した。にやにやと頭の悪そうな緩んだ顔をしている鮫島を見ているとだんだん腹が立ってきた。

学生時代に空手を経験している悟は、たとえいきなり襲われてもその状況を打開する力も十分あるし、鮫島より背も高い。この男が自分に何らかの因縁をつけて絡んできたのだとしても、腕力では勝る自信がある。だから鮫島に嫌悪感と不信感があっても、恐れは雀の涙ほどもない。

それでもこの手の男は何をしでかすか分からない。

人差し指と親指で煙草を摘まんでいる鮫島は煙を吐きながら爬虫類のような目で悟を舐めるように見ていた。

なかなか話を切り出そうとしない鮫島に対して悟は苛立ち始める。

「用がないのならもう帰りますよ」

吐き捨てるように言った悟は踵を返す。すると「ちょっと待てて」と、鮫島のしゃがれた声が背中越しに聞こえた。

「何です」

苛立ち混じりに言った悟は振り返って迷惑そうに鮫島を睨みつける。鮫島の相変わらざるの不愉快な笑みが悟の神経を逆撫でした。

そして鮫島は勿体ぶったように溜めてから口を開いた。

「先月だったかなあ」

悟の背筋が凍った。

…もしかすると、

…あの事か。

明らかに顔色が変わった悟を見て、鮫島は更にいやらしく顔を歪

ませる。まるで獲物に巻きついた蛇のようだ。

「先月：？」

「そうだよ。確か夜の十時頃かな。郊外の国道。ほら、海沿いの工場が並んでる所らへんだよ。アンタその辺り車運転してただろ？」

そう言った鮫島の視線は真っ直ぐに悟の目を捕らえていた。疑問形ではあるがその目が確信を得ている。

「ああ、仕事の帰りに毎日その道を通っていますが。それが何か？」
平静を装ってみたものの、声は震えている。

鮫島はそれを見逃さない。

「アンタ：そこでイケナイ事しなかったか？」

：イケナイ事。

おもむろに首を傾けて悟の顔を覗きこんでくる。煙草臭い。自分の言葉にどんな反応があったか、どれだけ弱ったか、観察されているようでこの上なく居心地が悪い。顔を顰めた悟は思わず身を引いた。

「何の事ですか：」

「トボケんな！」

鮫島のどすの利いた怒声が人気のない夜の高架下に響く。悟は大きな体をぴくりと引き攣らせた。今までの表情とは一転して鮫島は鋭く悟を睨んでいる。

悟が怯んだのを確認すると、鮫島は直ぐににやけ面に戻った。

「笹中さんよお。アンタその夜、そこで人を撥ねただろ：」

その言葉は悟の胸を貫いた。

喉がからからに乾き、視界が霞んでくる。人を撥ねた。その言葉が悟の頭の中で跳ね回って何度も反響する。

「何かの間違いじゃないでしょ：」

「そんなワケねえよ。アンタは誰にも見られてないと思ってたか知らねえけど、俺はこの目でしっかり見たんだからよ」

口籠った悟。その額に冷や汗が滲む。

：視られていたのか。

「暗かったって言っても、あれだけ派手に吹っ飛ばしたんだから気付いてないワケじゃないだろ。間違いない『やっちまった』って分かってるはずだ。それでもアンタは、ほったらかしでそのまま走り去った。つまり…」

轢き逃げってやつだろ。

鮫島は悟の反応を楽しむかのように溜めてから言った。

「僕はそんなの知らない、僕が轢いたって証拠なんてあるんですか！」

「証拠？　今アンタがここにいる事が証拠なんだよ」

どういう事ですか、と必死に取り繕って返す悟。煙草を一口吸って、悟から滲み出る動揺を確かめるようにしてから鮫島は言う。

「轢いたヤツの車のナンバープレート控えさせて貰ったんだよ。ナンバーからちよっと調べたら名前と住所と連絡先は分かる。それで今日呼び出したらアンタが来たってワケなんだよ」

この男を蛇と形容したのは間違いではなかった。

アンタは立派な犯罪者なんだよ、と言って蔑んだ目を悟に向ける。轢き逃げ、犯罪者。テレビや新聞でしか見聞きした事のないような言葉を自分に突きつけられた悟は真っ青になっていた。冷たい汗が背中に湧く。

「本当に気付かなかったんだ。暗かったし、あの時は急いでいたから人を撥ねたなんて分からなかったんです。もしそれが本当なら、今から…出頭してきますよ」

悟はそう言って俯いた。

「ウソつけ。往生際が悪い野郎だ」

青ざめた顔で鮫島の顔を見ると、彼は実に愉快そうに笑っている。今の悟とはまるで正反対の表情だ。

「何が気付かなかっただよ。撥ねた後、一回車止めて出てきただろ。それでアンタは轢いた男をきっちり確認してたじゃねえか。それでいてアンタはそのまま車に乗って何事もなかったように逃げたんだ。結局後で救急車は来ただけどアンタが轢いたオッサン、意識無か

ったぜ。可哀想に、あのオッサン死んじゃまったんじゃねえかな」

うう、と漏らして言葉が出てこない悟。

「出頭するなら勝手にしろよ。ただ、普通の交通事故と違って轢き逃げは罪が重いぞ。もし相手が死んだりしてたら罰金ぐらいじゃ済まねからな、もしかしたらムシヨに入って何年も出て来れないかも知れねえぞお」

にへらにへらと粘着質のある笑みを浮かべて、鮫島は弱り切って項垂れる悟の表情を下から覗き込む。煙草臭い息が悟の顔にかかる。追い詰められた。

悟はその場に崩れ落ちるように、アスファルトの上に膝をついた。そして頭を抱えて亀のように丸くなった。

「今…。今ホントに大事な時なんだ。だからバレル訳にはいかなかったんだ」

涙声で語る悟を、鮫島は冷たく見下ろしている。

鮫島のような、社会の底辺にいるようなガラの悪い人間に話しても理解できないだろうが悟は構わず胸中を話し始めた。

「幸せにしたい人がいるんだ。来年の春、僕はその人と結婚する事になってる。でももしあんな大事故を起こしてしまったとなると、会社をクビになるかもしれない。世間体だって悪くなる。そんな事になったら彼女を幸せにする事なんて出来なくなる。人生めっちゃくちゃだ」

こんな人間に言っても無駄だと分かっている、思わず身の上を語ってしまった事に自己嫌悪を覚える。ふうん、と案の定どうでも良いような相槌を打つ鮫島。矢張りこんなチンピラには自分の気持ちなど理解できないんだと悟は歯を食い縛る。

すると鮫島は蹲る悟の前に屈み込んだ。

「そこでアンタに相談なんだよ、笹中さん」

鮫島は馴れ馴れしく悟の肩に手を置いた。その手に汚らわしいものを感じた悟は小さく身震いする。

「相談？」

「ああ、警察には言わねえよ。俺だって警察は嫌いだからなあ。それに、どうせならアンタにはそのまま幸せになって欲しい」

警察が嫌いと言うのは本当だろう。しかし、後に言った言葉は明らかに心が籠っておらず嘘臭い。

「黙っててくれるんですか！」

「勿論さ。ただし条件がある」

悟はふと顔を上げた。そこには本物の蛇のように冷血で人間味のない目をした鮫島の顔があった。

「俺も金に困っていてね。リーマンやってるアンタは少なくとも俺よりは金もってんだろ？　ちょっと分けて欲しいんだよ」

「口止め料って事、か……」

どこまでも腐った人間だ。

「そういう事だ。三百万ほど用意してくれねえか？」

「さ、三百万！」

驚嘆する悟に対して、鮫島は至って当然の事のような顔をしている。しかし一般的なサラリーマンである悟にとって現実的な額ではない。

「借金とかすれば無理な話じゃねえだろ」

「でも……」

「良いのか、周りにバレたらアンタの人生めっちゃめっちゃになるんだろ。明後日まで待ってやるから工面してくれや」

額に冷や汗と脂汗が混じった物が滲む。

「そんな……明後日までに三百万なんて無理だ……。用意出来る訳がない」

「まあ、頑張ってくれよ」

悟の肩をぽんと叩いて鮫島は立ち上がった。そして短くなった煙草を指で弾く。放物線を描いたオレンジ色の火は工場の塀にぶつかって弾けた。

鮫島は膝をついたままの悟に「連絡待ってるからな」と言い残してから、背中を向けて歩き出した。その言葉も悟の耳には届いてい

ないようだ。

破滅、三百万。

二つの言葉が悟の頭上でめまぐるしく回転している。

「あ、そうそう」

立ち去りかけていた鮫島がふと振り返った。

「カナちゃんだっけ」

その名前を聞いて悟の首筋は冷たくなった。

「確か香那^{かな}って言ったよな、アンタの彼女。色白で、真面目そうでけっこう可愛い娘だよなあ。羨ましいなあ」

顔を上げて目を見開く悟。全ての血液が逆流するような感覚が彼を襲った。

「もし笹中さんが無理だって言うんだったら、アンタの彼女に頑張ってもらおうかな。文字通り体張って。胸も大きいし、けっこう良いセンいくと思うぜ」

鮫島は下品な舌なめずりをした。

…香那。

悟の心臓が冷たい血液を全身に送り出して巡らせている。鼓動が高まれば高まるほどに体温が下がってゆく感覚がした。

「香那は関係ない。これは僕だけの問題でしょう！」

「知らねえよ、そんな事。とにかく金になれば良いんだ。お前の女を守りたけりゃ明後日までに三百万用意しとけよ」

鮫島は野卑な笑い声を上げて背を向ける。

歯を食い縛って悟は拳を握りしめた。香那だけは、香那だけは巻き込みたくない。悟にとって彼女は全てだった。

愛している。

彼女の笑顔も、しっとりとした髪も、ふっくらした口唇も、柔らかな肌も、澄んだ声も、甘い香りも。彼女の全てを愛している。この先、死ぬまで一緒に生きてゆきたい。この世で唯一、そう思える女性だった。

純潔で純粋な香那の汚れる様など想像もしたくない。

「アンタが明後日までに金を用意できない事、ちょっと期待してんだぜ」

鮫島は歩きながら言った。

「実はよ…アンタの彼女、思いつきり俺のタイプなんだわ。こう見えて俺ってあんな感じの真面目で従順おとなしそうな娘が結構好きなんだよな。そんな子が調教されて夜の店に売られるなんて、想像しただけで興奮してくるぜ」

どくん、と悟の心臓が大きく打つ。

香那が見ず知らずの男の前で肌を露わにし、その体を触られ、舐められ、貪られる。その光景を想像しただけで視界が黒く霞んだ。

「あの娘の調教するのが楽しみだ。最初は泣くかもしれないけど、大概の女は一か月もあれば慣れちまうんだ。女って俺らが思ってるよりスケベな生き物だぜ。完成したらアンタにも見せてやるよ、淫乱な香那ちゃんをな」

鮫島はいやらしい想像をしながら歩き去ろうとしている。

…香那に手を出すな。

卑しく汚らわしい鮫島に香那の名前を口にされる事でさえ嫌悪を覚えるのに、この男は頭の中で香那を凌辱している。悟は許せなかった。しかし自分が三百万という大金を用意しないと香那は魔の手に落ちてしまう。

そうなる香那は自分の知っている純潔で純粋な香那ではなくなってしまう。

…嫌だ、香那を失いたくない。

香那が香那でなくなってしまう事は、悟にとって全ての幸せと未来を失うのと同じだった。香那の笑顔が頭の中に儚げに浮遊する。

…誰が悪いんだろう。

あの夜、一人の男を撥ねた自分自身だろうか。あんな時間に夜道を歩いていた撥ねられた男だろうか。それとも遅くまで残業をさせる会社だろうか。悟の中で様々な悪の根源が巡る。しかしどれも違った。

悟は目の前で背を向けている男を見た。

…こいつだ。

…こいつさえいなければ。

悟は脇に置いてあったコンクリートブロックを両手で拾い上げて、よろめきながら立ち上がる。それは冷たく重く、いびつな断面が悟の指に食い込んだ。

鯨島は姿勢の悪い蟹股歩きで真っ暗な夜道を進んで行っている。がにまた

その後を悟が音を立てないように近付いてゆく。

こんな男、いない方が社会の為なんだ。

そう何度も自分に言い聞かせる。すると鯨島は煙草に火を点ける為に立ち止まった。その背後に悟が静かに忍び寄るが、鯨島が気付く様子はない。鯨島の背中に手が届く程の距離まで来た時、悟はごくりと唾を飲んだ。

そしてブロックを大きく振りかぶり、鯨島の後頭部めがけて振り下ろした。

軽い感触の後に低い呻き声。鯨島は大きくよろめいてはいたが倒れなかった。どうやら後頭部には命中せず、側頭部を掠めただけだったようだ。不意を突いて一撃で決めるつもりだったが失敗してしまった。

悟の全身から冷や汗が噴き出る。

「てめえ…何のつもりだ！」

頭から血を流す鯨島は僅かに恐怖の混じった声で言った。まさか温厚そうな悟が攻撃してくるとは思っていなかったのだろう。

「香那には、手を出させない…絶対に」

目を合わせた瞬間に鯨島は恐ろしい獣と対峙したかのようにぴくりと引き攣った。悟はブロックを再び握り直して、鯨島の頭部に叩きつける。骨の軋む鈍い音に続いて、泣き声に似た悲鳴を上げる鯨島。

今度も狙いは外れたが、咄嗟に頭を庇った鯨島の腕と指がへし折れ潰れた。

「や、やめろって、彼女には手エ出さねえから。な、な？」

悟は聞く耳を持たない。

媚びるような目をした鮫島に更にブロックを叩きつける。顔面に当たり、とうとう鮫島はその場で仰向けに倒れた。

「痛てえ、痛てえよお」

鼻血を垂らしてアロハシャツを汚す鮫島の上に馬乗りになる悟。

再びブロックを大きく振りかぶった。悟は潰れた手で顔を守ろうとする鮫島を見下ろした。

そして顔面めがけて重いブロックを振り下ろす。

何度も何度も。手で守ろうとしてもお構いなしに、歯が折れようともお構いなしに、許しを請われてもお構いなしに。

この手のチンピラの言う事は信用できない。「もうしない」「何でもするから」と口では言っておきながら、後で必ず仲間を連れて報復に来るに決まっている。だから二度と会う気も起こらないように徹底的に痛めつけるべきだ。

鮫島の鼻は折れて曲がり、歯も何本かなくなっている。鼻腔や口から血が溢れて呼吸を遮っているのか、鮫島は苦しげにごぼごぼという音を鳴らしていた。その赤黒い血は悟のズボンにもかかり、形の不揃いな水玉模様を作っていた。

このまま殺してしまっても良いのではないか。

悟はそうとさえ思った。こんな人間、一人この世からいなくなったらところで悲しむ者などいないだろう。

寧ろいなくなった方が皆喜ぶかもしれない。もしここで本当に自分と香那から手を引いたとしても、また他の誰かに同じような脅迫をするに決まっている。それならここで殺してしまうべきだ。

悟は無情なほど淡々と、単純作業のように鮫島の顔面を潰していた。鮫島は時々血反吐を出すだけで抵抗すらなくなり、顔ももう原型を留めていなかった。

あんた、何やってるの！

ふと背後から甲高い叫びが突き刺さり悟は我に返った。立ち上が

って振り返ると、一本道の奥に柴犬を連れた中年女性が悟を見て震えている。

「け、警察呼ぶわよ」

女性は悟の姿を頭の方から足のつま先まで見渡しながら警戒姿勢を取っている。はっとなった悟は凶器となった血塗れのブロックをその場に捨てた。

「あの…違うんです…」

悟が弁解しようと女性に歩み寄ろうと足を踏み出したら、その女性には短い悲鳴を上げて後ずさった。顔にまで返り血を浴びた悟と、その足元には顔面を潰され動かなくなった鮫島の姿がある。

誰がどう見ても悟が悪者だ。

「僕はこの男に脅されて…」

一方的な悪者という誤解は解いておかなくてはならない。悟が腫れ物に触れるように慎重に女性に近寄ろうとする。

「誰か助けて、殺される！」

夜を切り裂くような悲鳴。更に叫んだ内容もサスペンスドラマのように分かりやすい。悟は思わずその場でたじろいで後ずさった。

今の悲鳴の所為か、近くの何軒かの住宅の窓に電気が灯った。

気が動転した中年女性はまだ訳の分からない事をわめき散らしている。このままだと警察が駆けつけて来るのも時間の問題だ。

悟の足元では鮫島が血の混じった真っ赤な泡をぶくぶくと口から溢れさせている。この状況を見ると、どう考えても自分が加害者だ。警察に捕まると傷害罪に問われるし、更にこの前の轢き逃げの件もばれてしまう。

そうやってしまえば未来はない。

「仕方なかったんだ、僕は悪くないんだ」

悟はがたがたと震える足を無理矢理動かして、その場から逃げ去った。背後から女性の喚き声が響き続ける。

…僕は悪じゃない。

悟は走った。

未来を、幸せを守る為に。

※

冷蔵庫を開けた奈々瀬はビーカーにミネラルウォーターを汲んで一気に飲み干した。そして直ぐに同じビーカーにもう一度汲み直す。「ほら、紗季も飲みなよ」

流し台に顔を突っ込むようにして咳込んでいる紗季に水の入ったビーカーを差し出すと、彼女も一気に飲み干して、机の上に乱暴にビーカーを置いた。「実験器具は大事に扱いなさいよ」と奈々瀬がからかって紗季は無視して水道の蛇口を捻って水勢を増した。

「どう、生き返った？」

「全く…まだ喉が焼けるように痛いよ」と紗季。

彼女は泣き出しそうな顔をして水道で何度もうがいしている。その様子を見て奈々瀬は笑った。

「ハズレのコーラにはタバスコ一本全部入れようって言ったのは紗季でしょ。完全に致死量越えてるじゃん。私達は反対だったでしょ」紗季はぐうの音も出ない。

紙町女子高等学校、科学部三年の五人組は理科準備室に集まっていた。

九月になって新学期が始まり、彼女達の部室兼活動場所である理科実験室の掃除と荷物整理をしている途中に、いつのまにかタバスコシアンルーレットが始まっていたのだった。

気が付けばもう夕方。

片付けもほとんど終わらない内に日が暮れようとしていた。

流し台に立ってビーカーを洗うのを手伝う奥山アルマは、奈々瀬と紗季を茶色い瞳で見比べて感心したように言う。

「紗季のプレッシャーの掛け方すごいよね。見てる方まで緊張したよ。やっぱ特進クラス同士の心理戦って見応えあるね」

「特進クラスだからってこんな遊びには関係ないでしょ」

念入りに口を濯ゆすぎながら紗季が答えた。喉がひりひり痛むのか何度も咳払いを繰り返している。

そんな彼女を見てアルマは口元に手を添えて上品に笑った。腹を抱えて大笑いという姿は、育ちの良いアルマからは想像もつかない。紗季は口に含んだ水を流しに吐いた。

「ああ、まだ舌が痛い……。このタバスコドリンクって、みんなが思ってるよりずっと強烈なんだからね。嘘だと思っただったら飲んでみなよ、そのお人形さんみたいな顔も不細工に歪むよ、きつと」心なしか紗季の声はがらがらと濁っている。

「そんな事言われたら飲むわけないじゃん」

洋画の女優がするような手のひらを上に向けて首を傾げる仕草も、混血であるアルマには良く似合う。

「くっそー。その前にこの借りは絶対に返すからね、奈々瀬！」

いつでもどうぞ、と返して奈々瀬は舌を出した。

「これで紗季とは五勝五敗一分ね。今の所イーブン。もう次の勝負で決着にしようじゃないの」

「五勝五敗一分。そうよ、あの引き分けさえなければ今日で決着だったかもしれないのにねえ、くるみちゃん……」

紗季はタオルで口を拭きながらじろりと小宮くるみこみやを睨みつけた。くるみは頭を抱えて小動物じみた素早い動きで机の影に隠れようとする。待ちなさい、と奈々瀬に鋭く呼び止められると、申し訳なさそうに顔を出した。

「いや、その：あれはですね」

弁解しようとするくるみを二人が睨む。もめている原因は夏休み前に行われたワサビ寿司ロシアンルーレットの事である。

「アンタの中途半端な優しさが、この争いを生んだんだよ」

「あ、ああ：申し訳ない」

くるみは申し訳なさそうにぺこりと頭を下げた。

ワサビ寿司の時の戦いではくるみが「毒」を仕込んだ。しかしワ

サビの量が少な過ぎて、刺激物に免疫のある二人にはどれがハズレか判らず、結局二人で美味しく寿司を堪能しただけという和やかな結果に終わってしまったのだった。

「もう済んだ事だから良いんだけどね」

じゃあもう怒らないでよ、と小声で洩らしたくるみは二リットルのペットボトルに入れて常備しているウーロン茶をごくごくと飲む。気の小さい彼女は、拙い状況に陥ると緊張の所為で酷く喉が渇くらしく、その都度ウーロン茶をがぶ飲みするのだ。どこか愛嬌のある憎めないその姿も科学部の名物になっている。

「ところで次はどんな勝負するの？」

ビーカーを洗い終えて水滴を切るアルマは期待するような目で奈々瀬と紗季を見比べていた。

「そうだなあ。例えば、フグ刺しロシアンルーレットとか？　くるみが適当に捌いたフグ刺しを交互に食べるの」と奈々瀬。

「いやいや、それってマジで死んじゃうじゃん。トテロドトキシンだっけ。神経毒を甘く見ちゃ駄目だよ」

苦い顔をして首を横に振る紗季。

「冗談だって、流石に死んじゃったら洒落にならないでしょ」

準備室の片づけを続行しながらも、頭の中は面白いゲームについての事でいっぱい科学部メンバー。次は誰が、どのような物を口にして醜態をさらすのだろうかという事ばかり考えていた。

奈々瀬はカーテンと窓を開けて空気を入れ替える。

夏の終わりと秋の始まりを告げる涼しい風が吹き込んできた。入り込んできた新しい空気に、薄いガラス窓がみしりと軋む。

三階の理科準備室の窓からは中庭が見える。昼休みにはベンチに座って学食で買った昼食を食べる生徒達で賑わっている中庭も、今はもう誰もいない。池の水面が真っ赤な夕焼けを寂しげに反射させているだけだった。

ふと、秋の匂いがした。

「うわあ、随分涼しくなってきたね」

準備室の隅で、ホルマリン漬けの解剖されたカエルが入った瓶を愛おしそうに拭く水谷麻衣子^{みずたに まいこ}は、感情の籠らない声でぽつりと呟いた。

「もう九月だもん。じめじめむしむしの夏ともおさらばよ。今月末には夏服ともおさらばになるのかな」

奈々瀬の言葉にこくりと頷いた麻衣子は、縁なし眼鏡の奥にある眠たげな眼で夕焼け空を眺めている。彼女のショートヘアがふわりと秋風に揺れていた。

三年の彼女達が夏制服を着るのはこの夏が最後。このまま涼しくなると、もう二度と紙町女子の夏制服に袖を通す事はなくなってしまうのだ。そう考えると奈々瀬は少し名残惜しいような気がした。奈々瀬と紗季の熱戦で、じつとりとむせ返っていた準備室に新鮮な空気が柔らかく入り込んでくる。五人は久しぶりに新鮮な地上の空気を味わうモグラのように、揃って大きく深呼吸をした。

「高校生活最後の夏も終わっちゃったんだね」

麻衣子が薬瓶の整理をしながら淡泊に呟く。彼女の無感情な声でそう言われると余計に寂しい気がする。

「夏が終わったって事は、ここからは受験勉強漬けの毎日になるのかな」

紗季の言葉に奈々瀬は「げっ」と声を漏らして苦い顔になった。勉強など、夏休みは宿題を形だけ片付けたぐらいで、他には全くと言って良い程やっていなかった。受験勉強という言葉を聞くと胸が苦しくなる。

「アルマは良いよね、推薦で大学決まってるし」

すると困った顔でアルマは微笑む。ビスクドールのような彼女の白い肌は窓から差し込む夕日に照らされて紅く染まっていた。奈々瀬の言葉には肯定も否定もしないで、アルマは聞き返してきた。

「紗季と奈々瀬はやっぱり国立大なの？」

まあ私はね、と紗季は答えた。奈々瀬も身を乗り出して慌てたように、そうそう私も国立だよ、と続ける。あまり勉強していないの

で胸を張って言えない。

もう九月。高校生活も残す所あと僅かだ。

他府県の大学の薬学部への推薦が決まっているアルマ。大学へは行かずに爬虫類ペットショップでバイトしようかな、などと言っている麻衣子。一方で特進クラスの奈々瀬と紗季は国立大学への進学を期待されている。そしてマイペース過ぎるくるみはまだ具体的な志望校すら曖昧模糊な状態だった。

進路が決まっている者、決まっていない者それぞれだが、半年後には科学部の五人もそれぞれの道に進んでしまう。一年で科学部に入部した時から、楽しい事も辛い事も分かち合って一緒に馬鹿をやってきた仲間とも、もう直ぐ離ればなれになってしまうのだ。

いつかはその時が来ると分かっていたのだが、いざその時が近づいてくると気持ちが落ちてしまう。

いつまでも高校生のまま、馬鹿なゲームばかりやっていられたらどれだけ楽しい人生なんだろうと、科学部の五人は思っていた。

そう、馬鹿なゲームを。

「暗くなるのも早くなったなあ。よし、五時半までには片付けちゃおう。それからみんなで駅前のカフェでお茶しようか」

紗季が提案すると、他の四人も「賛成!」と声を揃えた。

カフェという目標が出来て彼女達の作業速度が増す。後でお茶するという事が決まっているにもかかわらず、くるみはペットボトルのウーロン茶をがぶ飲みしている。そんなに水分を取っていると、美味しい紅茶の味が分からなくだろうと思ったが、重い荷物を運んだり体を動かしたので喉が渴いたのだろう。喉を鳴らしてウーロン茶を飲むくるみの姿を見ると、こちらまで喉が渴いてくる。

奈々瀬は薬品棚の整理に取り掛かった。

茶色い瓶にはいずれもラベルが貼られている。塩化ナトリウムやエタノールなど授業でもよく使用するものから、いつ使用するのかも分からないような薬品まで、恐らく百以上の薬品が棚の中に並んでいる。

その中の一つを手に取り、目を細めてラベルを見る。

「ねえ、α・ヒドロキシプロピオン酸って何？」

「何それ、そんなの三年間で一度も使った事ないよね」とくるみ。
使わなそうなら捨てちゃえば、と言った紗季はこちらに目もくれずモップ掛けをしている。そうだね、と下顎を突き出して同調した奈々瀬は薬品瓶の蓋を開けた。

中には白い粉末が入っていた。

シンプルな瓶、シンプルなラベル。茶色い薬品瓶に入った粉末は不思議な魔力を帯びているように、奈々瀬の知的好奇心を掻きたてる。もしかして危険な薬品なのだろうか。しかし液体ではないし、少しぐらい触ってみても大丈夫だろうと、奈々瀬はそろりと瓶の中に指を伸ばした。

「何してるの奈々瀬！」

空気を切り裂くような叫びに奈々瀬はぴくりと引き攣った。

その場の全員が作業の手を止めて奈々瀬に注目する。声を上げたのはアルマだった。彼女は真っ青な顔をして奈々瀬を見ている。そしてその震えた口唇を動かして、震えた声を発した。

「今：α・ヒドロキシプロピオン酸を触ったの？」

「え、ちよつと触ってみたんだけど：どうしたの」

奈々瀬がそう答えるとアルマは両手で口元を覆って大きく目を見開く。

まずかったのだろうか。取り乱すアルマを見て奈々瀬にも不安が伝染する。え、何なの何なの、と奈々瀬は狼狽していた。

するとアルマが一言だけ口にする。

劇薬よ、と。

「ちよつと待ってよ、これってもしかして猛毒なの？」

奈々瀬は慌てて瓶の蓋を閉めて机の上に置いた。その近くにいたくるみも逃げるように瓶から離れた。

「でもちよつと触ったぐらいだよ。飲んでもいないし、目にも入ってないから大丈夫だよ、ね？」

奈々瀬が一步進むと、アルマは距離を置くように後ずさった。同じように他の三人も奈々瀬から一步離れる。

…何なのよ。

皆はまるで化け物を見るような目で奈々瀬を見ている。奈々瀬の胸の中で、上手く表現出来ない灰色の不安がふつと泡立ち出した。するとアルマが何度か深呼吸して息を整えてから口を開く。

「奈々瀬、落ち着いて聞いてね。α・ヒドロキシプロピオン酸は経皮でも危険なの。しかも指先でしょ。爪の間から毒素が侵入して、やがてそれが全身に回って、嘔吐や目まいの症状が表れるの。それから、最悪の場合…」

そこまで言ってアルマは口籠った。

「もしかして、私…死ぬの？」

アルマは目を伏せるように頷く。

死。その言葉が脳裏を過った奈々瀬は、弾かれたように流し台に駆けて蛇口を捻る。勢い良く出る水に、薬品の付いた指を晒してごしごしと血が滲むほど擦った。

死にたくない。まだ死にたくない。

「ねえ、奈々瀬」

不意に名前を呼ばれて振り返ると、麻衣子が例の劇薬の瓶を持っていた。人差し指で眼鏡のブリッジを押し上げた彼女はおもむろに薬品瓶を開けた。彼女が瓶の口をこちらに傾けると中の白い粉末が見える。

すると麻衣子は瓶の中に手を入れた。

「ちょっと麻衣子、何してるの！」

奈々瀬が叫ぶと麻衣子は僅かに口元を綻ばせた。彼女が何を考えているのか全く分からない。麻衣子は更に驚くべき行動をとる。

粉末をつまみ上げ、それを自らの舌の上に乗せた。

「ま、麻衣子…」

奈々瀬は目を丸くして絶句した。驚愕する彼女の目を見たまま、麻衣子は長い舌を口の中に戻してあの白い粉末を味わうように口を

動かしている。

「全く、アルマも意地悪だよ」

麻衣子がアルマの方へ目配せする。すると彼女は柔らかそうな栗色の髪を揺らして、くすくすと笑っている。

…え、何？

「これは猛毒でも何でもないの。α-ヒドロキシプロピオン酸ってただの乳酸だよ」

「乳酸…」

そう乳酸、と言って頷く麻衣子。

「知ってるでしょ、筋肉疲労の原因物質って言われてたやつ。食品添加物として使われてるから口に入っても死なないよ」

「そうだったの！　という事は…」

ちらりとアルマの方を睨むと、彼女はピースサインをこちらに向けていた。どうやら彼女に一本取られたようだ。

「それにしても奈々瀬の焦り方：面白かったなあ」

普段は無表情な麻衣子が愉快そうに声を出して笑う。

滅多に感情を表に出さない彼女の笑いの琴線は人の恥ずかしい姿らしい。あまり褒められた趣味ではない。その横でアルマも口元を押さえて肩を震わせながら笑っていた。

「ちよっと、こっちは本当に死ぬかと思ったんだからね！」

笑われて悔しくなった奈々瀬がアルマと麻衣子に突っかかって行こうとする。すると間に入って来た紗季が「はいはい、さっさと掃除終わらせちゃおう」と奈々瀬の背中をぽんぽん叩いて薬品棚へ促す。

机に置いてあった瓶を手にとって憎々しげに睨む。ちくしょう、アンタの所為で恥かいたじゃないの。奈々瀬は薬品瓶に心の中で文句を言ってから薬品棚に戻した。

固体、液体別に五十音順に薬品を並べ終わった。こうして並べると改めてまだまだ知らない薬品が多かった事に気付く。特に奈々瀬の視線の高さから外れていて、普段なかなか目にしない一番上の段

に見覚えのない薬品が多い。

：何だ、あれ。

一番上の棚の奥、炭酸カルシウムの薬品瓶の後ろに何かが挟まっている。紙切れだろうか。奈々瀬は背伸びをして棚の奥に手を伸ばす。ほぼ手探り状態で瓶を倒さないように慎重にさっき見た紙を探す。

：あ、あった。

奈々瀬がその紙を引き抜くと埃も一緒に落ちてきた。咳払いをしながら肩に掛かった埃を払っていると、隣の書棚の整理をしていたくるみがやってきた。

「どうしたの、何その汚い紙？」

彼女はペットボトルに口を付けたまま質問する。奈々瀬の手にあるのは折り畳まれたノートの切れ端だった。よくあるキャンパスノートなのだが、相当古い物らしく全体的に変色しているし端もぼろぼろに朽ちかけて柔らかくなっていてる。

「ああ、何か棚の奥に挟まってたんだけどね。何だろう」

「もしかしてラブレターとかかな？」

何故かほんのり頬を赤らめているくるみ。見ちゃおうよ、と奈々瀬に寄って来る。

「何言ってるのよ。女子高でラブレターなんか落ちてる訳じゃないでしょ」

「いやいや分かんないよ。別の学校の男の子から貰ったのかもしれないし。あ、ウチの学校生徒は女子しかないけど：もしかして生徒と教師の禁断の愛とか？ それか女同士の、もっと禁断の愛かなあ？」

くるみは自分で言っておいて興奮したのか、またウーロン茶をがぶ飲みする。二リットルのペットボトルが空になってしまいそうだ。そんな大量の水分がこの小さな身体の、いったいどこに入っているのだろう。

「ホント想像力が豊かな事。くるみは恋愛小説でも書いてみたらど

う？　それだけ空想妄想が働くなら面白いのが出来るんじゃないかな」

まさか本当にラブレターな訳がないだろう。

それでも奈々瀬の頭には「もしかしたら」という事が植え付けられていて、ラブレターではないにしろ、ゴシップの類のものを少し期待してしまっていた。

奈々瀬は畳んである紙切れを開く。

…何なの、これ。

その中を見た瞬間、彼女の頭に電流が走った。それはラブレター以上に刺激的な内容だった。

ねえ何なの？　と背伸びしたくるみが手元を覗き込んでくる。すると他の三人も奈々瀬達の様子に気づいたようだ。

「ちよつと、みんな見てよ。何か面白い事書いてあるよ」

奈々瀬は草臥^{くたひ}れた紙を机の上に広げた。五人はノートの切れ端を取り囲むようにして、机の周りに集まった。しわしわの黄ばんだ紙を丁寧に手で伸ばす奈々瀬。力加減を間違うと破れてしまうどころか風化してしまいそうだ。

「科学部サバイバルゲーム？」

首を伸ばして目を細める紗季が一行目の文字列を口にした。

「今まで私達がやってた遊びより面白そうじゃない？」

それぞれの顔を奈々瀬が見回すと、四人は真剣に文字を追いながらもこくりこくりと首肯している。

そこに記されてあったのはサバイバルゲームのルール表。雑な箇条書きで表されているだけだが、シンプルでいて面白味があって彼女達の心を掴むには十分だった。

◆科学部サバイバルゲーム◆

？ 日常生活中、参加者同士で毒を仕掛ける（ワサビでもタバスコでも何でも可）。

？ 自ら降参を表明しない限り何度でも復帰できる。

？一度降参した者への攻撃は禁止する。

？参加者以外への攻撃は厳禁とする。

？開始から三ヶ月を経っても参加者が二人以上残っている場合は引き分けとする。

？万が一のため、参加の際に「自殺」という旨の遺書を直筆で用意する。

「へえ、さっきみたいにわざわざ場を設けずに、常に勝負が続いてるって事か。私達が今までやってたのと全然違うじゃん」

紗季はその紙切れを手にとって興味深そうに頷きながら眺めている。

彼女の言うとおり、このルールならロシアンルール方式にしなくても良い。期間中ならいつでもどこでも勝負ができる。

裏を返せば家でも学校でも二十四時間気を抜けないという事になる。

「じゃあ、スタートから三ヶ月の間なら、予告なしで食べ物に変な物を入れても良いって事だね。例えば後でこっそり誰かさんのペットボトルに辛子を入れるとか」

丸椅子に座って頬杖をつく麻衣子はくるみを見て薄く笑う。ぴくりと反応したくるみはウーロン茶の蓋を固く閉ざして背中に隠した。それにしても…。と、顎に人差し指を置いて難しそうな顔をするアルマは、紗季の持つ紙切れを覗き込んでいる。

「随分古い紙だけど、これって誰が書いたんだろうね」

「さあ。でもタイトルで『科学部』って書いてあるし、きっと昔の科学部の先輩なんだろうね。私と紗季がやってたタバスコロシアンルールににしても、去年の先輩がやってたんだし」

先人の知恵、とでも言うべきだろうか。

くじ引きのようなゲームばかりしていた彼女達にとって、この発想は目から鱗だった。とてもではないがこのサバイバルゲーム方式のルールは思いつかなかっただろう。

紙町女子の科学部は昔からこんな遊びばかりしていたのかと思うと、奈々瀬は会った事もない先輩達にどことなく親近感を覚えた。くるみが何か言いたそうな顔で口をぱくぱくさせている。どうしたの、と奈々瀬が尋ねると彼女は「ここ」と言って？を指差した。「遺書って、何で要るんだろう：ね」

それは全員が引っ掛かっていた事らしく、くるみの言葉に五人とも黙り込んだ。さらには「自殺」という物々しい言葉の存在感が、高校生同士の遊びにしてはあまりに大き過ぎる。奈々瀬は何も答えられない。

まさか、死者まで想定したゲームなのだろうか。

「雰囲気作りでしょ？」

アルマが軽い口調で答えた。彼女は続ける。

「やっぱりこういうゲームって入り込まなくちゃ感じが出ないですよ。遺書を書くって事はゲームに参加するって意思表示と儀式の意味があるんじゃないかな」

彼女の言うとおりで。部活メンバー同士の遊びが殺し合いに発展するなどあり得る筈がない。それでも遺書を書くという行為自体が不思議なりアリティを生み、よりゲームへのめり込むことが出来るきっかけとなる。

アルマの言葉を借りると、まさしく儀式だ。

「ちよっと、麻衣子：何してるの？」

麻衣子は机の上にノートを出してボールペンで何やら書き始めていた。ふと手を止めて奈々瀬の顔を見上げる。

「何って、遺書書いてるの。みんなもやるでしょ、科学部サバイバルゲーム」

眼鏡の奥の虚ろな瞳は真剣そのものだ。どうやら冗談ではないらしい。

「よし、私も」

「紗季！」

麻衣子に後れを取るまいと紗季までノートを取り出して遺書を書

き始める。それに続いてアルマまで机の上にノートを開いた。三人は黙々と、架空の死の理由を考えて文字にしてゆく。

お父さんお母さんごめんなさい。もう生きてゆけません。全てが嫌になりました。辛いです。悲しいです。苦しいです。さようなら。三人は思い思いの文面を綴ってゆく。後ろ向きで絶望的な言葉を書いているにもかかわらず、その顔は妙に生き生きしていて気味が悪かった。

…毒を仕掛けるサバイバルゲーム、か。

…アブナイ遊びだなあ。

奈々瀬は三人の様子を窺いながら迷っていた。仲の良い科学部メンバーの全員が敵になり、どこからともなく自分に毒牙を向けてくる。ゲームが始まれば、今の自分達の関係が崩れてしまうかもしれない。

良くない事だ。そう思いながらも奈々瀬の手が疼く。目の前に極上のスリルがぶら下がっているのだ。

…まあ、ちょっとぐらい。

奈々瀬は鞆から英文法のノートを取り出して一枚千切り、机の上に置く。

「私が一番になるから、よろしく」

「やっぱり乗ってきた。奈々瀬にはさっきの借りを返さなきゃね」と紗季。

あつ、と隣でくるみが声を漏らしたと同時に、先に遺書を書き始めていた三人が奈々瀬の方を見て微笑んだ。

「仲間外れは嫌だよ!」

全員参加するような空気に炙り出されたように、くるみも鞆からノートを取り出して机の上に力強く置いた。

科学部三年の全員がサバイバルゲームに参加する事になった。

…ちよつくら、やってみようかな。アレの練習だと思って。

…そう。これは練習。

かりかりと鉛筆の音だけが響いていた時、紗季が口を開いた。

「思ったんだけどさ、科学部サバイバルゲームって名前ダサくない？」

確かにヒネリがないよね、とアルマもそれに同調した。くるみと麻衣子は別に気にしていない様子だったが、紗季とアルマは「何か他に良い名前はないのか」という目で奈々瀬に催促してくる。

「奈々瀬、何か思いつかない？」

何で私に振るの、と思いながらも奈々瀬は腕を組んで考えていた。

…毒を仕掛け合う科学部の私達、でしょ？

最近の流行語で、インドア派の女性を家ガールと言ったりアウトドア派の女性を山ガールと言ったりするのを思い出した。そして今、英文法のノートの切れ端を使っていた事から一つ思いついた。

奈々瀬は書き慣れた筆記体でノートにペンを走らせる。

— P o i s o n G i r l —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2028y/>

ポイズンガール

2011年11月8日03時10分発行